博士学位論文審査要旨

２０１８年１２月１４日

論 文 題 目： 版本往来物・教訓書とその作者から捉えた、近世中期の庶民教育に関する研究―中村三近子とその周辺を事例として―

学位申請者： 和田　充弘

審 査 委 員：

主　査： 社会学研究科　教授　沖田　行司

副　査： 社会学研究科　教授　金子　邦秀

副　査： 社会学研究科　教授　中川　吉晴

要　　旨：

江戸時代の庶民教育に関する研究は、手習所（寺子屋）等の施設に関するものや往来物と呼ばれるテキストに関するもの、手習所の師匠に関する研究など、その研究蓄積はかなり豊富である。中世の寺院教育が世俗化し、一般の庶民に文字学習が浸透してゆくのは、商品経済が発達し、農村においても商品作物の生産が始まり、契約書の作成など、「読・書・算」が日常生活と密接な関係を持つ状況の出現による。教育施設に関しては、近年の地域史の成果により、個人経営から村落で師匠を雇用した実態などが解明されている。また往来物の研究に関してもかなりの研究蓄積がある。これに比して、往来物の作家に関する研究は必ずしも十分とはいえない。特に手習所が普及する元禄・享保期の作家研究は未開拓の分野ともいえる。

本論文では、町人経済が台頭し、町人文化が形成された元禄・享保期に、往来物や教訓書の作家として、また手習所の経営者として活躍した京都在住の中村三近子について、これまで十分に光が当てられていなかった人物像とその作品の特質の解明が試みられている。

第一部では、京都の町儒者として町人を教化する主体としての三近子に注目し、当時の大坂・京都・江戸の三都の出版業界との関係を分析しながら、手習いのテキストに商業的な付加価値を付与した作品を書きあげたことを論証している。とりわけ、京都町人の生活を理想的に描く半面、封建為政者の「名君」による「太平」の実現を目指す作品を発表するなど、庶民生活の実用に止まらず、積極的に秩序の保持を目指し、君主の仁政論を拠り所とした教訓書を手がけ始めた意味を検討している。

第二部では三近子が作品を量産する時期を取り上げ、この時期の特質として独自の仁政論と教育（教化）を接合させようとする試みにあると実証している。武士を対象とした作品である『温知政要輔翼』では、仁政を継続してゆく条件として、武士に学問を通した「心法」の修得を説き、人民に「仁慈」を施すための工夫の必要性を説く独自の「仁政論」を展開していることを実証的に明らかにした。さらに、その改訂版では、仁政が実践されない場合に人民の心に生じる「念慮」に言及し、君主にとって脅威となるものであると説き、仁政の重要性を為政者に認識させようと試みていることを論証した。この「念慮」は、やがて万人に賦与されている「善念」に置き換えられ、善事・善行に共感する心として描かれていることを明らかにした。本学位申請者は、人民も学問を通して、日常生活の様々な局面においてこの「善念」を確認する行為が必要であるとする三近子の主張は、人民が「仁政」の実現に参画してゆく構造を持ったものとであったと実証している。

第三部では、三近子が他の作家と合作した作品の分析を試みている。これらの作品において、町人社会での人間関係を構築する要諦を描いたり、保身のための処世術を説くなど、あくまでも

実用的な教訓や手習い文章の作成を重視していると指摘している。これらの実証的な分析を通して、本学位申請者は、三近子の庶民教育思想の特質を、家の維持や村や町の共同体の自治と封建秩序の維持の両立という、江戸社会が直面した課題を取り込み、それらを理想的な人間関係と社会参画へと方向付けようとしたところにみられると結論付けている。本論文は、中村三近子の版本を発掘し、それを翻刻して解説するという地道な作業を積み重ねた実証的な研究方法に基づくものであり、中村三近子の人物と作品を明らかにしただけではなく、近世庶民教育史研究に新しい知見を加えたものと評価できる。

よって本論文は博士（教育文化学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

学力確認結果の要旨

２０１８年１２月１４日

論 文 題 目：　版本往来物・教訓書とその作者から捉えた、近世中期の庶民教育に関する研究―中村三近子とその周辺を事例として―

学位申請者：　和田　充弘

審 査 委 員：

主　査：　社会学研究科　教授　沖田　行司

副　査：　社会学研究科　教授　金子　邦秀

副　査：　社会学研究科　教授　中川　吉晴

要　　旨：

2018年12月14日17時より一時間にわたり、博士論文の内容に関する公開講演をおこなった。聴衆者から中村三近子や手習所に関する質問と、それに対する応答が40分間行われた。いずれの質問にも的確に答え、日本近世教育史や研究の方法論である文献実証学に関する深い知識が確認された。その後、主査と二人の副査を交えて、約30分間にわたり、専門的な知識と学力に関する質疑応答がおこなわれたが、いずれの質問にも的確に答え、今後の課題も認識していることが確認できた。

本学位請求者は長年にわたり複数の大学で教育原理や教育史の講義を担当し、教育文化学に関する豊富な知識を有していることが確認できた。また、博士論文の要旨や、日本の近世教育史の専門用語を英語に翻訳するなど、確かな語学力も確認できた。

以上のことから、本学位申請者の専門分野に関する学力ならびに語学力は十分なものであると認められる。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目： 版本往来物・教訓書とその作者から捉えた、近世中期の庶民教育に関する研究―中村三近子とその周辺を事例として―

氏　　名： 和田　充弘

要　　旨：

近年、近世前・中期における寺子屋教育の普及を示す複数の事例が報告されるが、直接の史料が豊富な後期・幕末と比べると、研究の困難さは否めない。前・中期庶民教育の研究を進展させるためには、第一に後期・幕末の研究成果と論点を整理し、そこから時代をさかのぼり前・中期を捉え直すことと、第二に同時期の史料としては、往来物など関連の深い版本を活用することが求められる。

寺子屋の開業数が激増し、庶民の通学が一般化する後期・幕末については、従来、教育内容を基礎的な読み書き計算と生活・職業に直接役立つ文字・知識の習得に限定し、商品経済の展開に対処できる個人ごとの能力の形成を目指したとされてきた。しかし近年、この時期の寺子屋でも儒学の基礎や和歌、俳諧、謡曲の教授が数多く行われ、寺子屋と私塾の境界は不明瞭で、両者の中間に位置する施設も所在することが指摘されている。道徳的な教訓に関しては、支配の手段とは別に、強靭な道徳的自律を成し遂げ、個人の形成を図るものも知られている。

昭和戦前期に石川謙は近世庶民教育における実用的なものと、学問、芸術、教養など、そうではないものとの対立を、さらには前者が優位となる展開を描いた。しかし後期・幕末にも両者の共存が根強いのであれば、実用の意味や道徳的な教訓の性格を問い直すことも合わせ、こうした構造の源流を前・中期に探ることが求められよう。

近世往来物に関しては、習字の手本を主とする初級テキストの総称と捉えられてきたが、近年、文章作成能力への習熟という点が注目され、実際、近世を通じ、寺子屋では手紙文を教材化した消息科の往来物が重視されたという。これに女子用往来物を加え、時代を下るに従い実用化の傾向が強まる中で、18 世紀の前半期に女筆手本類から女子用文章への転換が問題とされ、19 世紀の初頭、滝沢馬琴が「雅俗」折衷の文例集を著すなど、それに抗する動きがみられたことも報告されている。後期・幕末の寺子屋では教育内容が共通化してゆき、中級以上の段階で版本往来物の使用が目立つという。近世往来物は寺子屋教育と重なり合う関係にあった。

近世往来物の作者としては、17 世紀の版下作成に従事した実務的な書家、17 世紀末・18 世紀初頭の寺子屋師匠、19 世紀初頭以降では戯作者の参入や、書家兼寺子屋師匠の存在が知られている。しかし特定の作者を選び出し、往来物を含むその作品を詳しく考察し、それらを総合して教育思想をまとめるような、本格的な研究は未開拓に近い。

本研究では元禄・享保期に活躍した版本往来物・教訓書の作者で京都在住の浪人、中村三近子（1671～1741）とその周辺の作品を事例に、この人物に集約された教育思想を明らかにし、近世中期庶民教育の構造的な特徴の解明へと繋げたい。従来の三近子研究では石川謙、石川松太郎が代表的な往来物を紹介し、中野三敏が近世文学の立場から作品の全体像を概観し、長友千代治が出版史の立場から節用集の作品に注目している。

第一部では三近子の人物像と作品の全体像を概観し、初期と量産期の直前までの作品を通じ、往来物と教訓書の出版の世界に参入してゆく過程を考察する。

三近子は儒学の基礎と手習、和文体の文章作成を私塾で指導し、零細な教化主体として庶民生活と共存する町儒者であった。書物による教導の対象としては独立した家を構え、町の自治に参

加できる裏借屋層までが意識された。三都の書店がその作品を有力な商品として扱い、流行の下限は町の自治機能が低下してゆく18世紀の中・後期であった。

近世の商業出版では元来、往来物は通俗的な草紙に区分される。さらに17世紀末・18世紀初頭以降の上方では、庶民生活からの需要に一層適応した新興の作者と作品が台頭する。このとき出版業者は手習のテキストに様々の商品的な付加価値を加え、需要への積極的な便乗を試みた。一方、作者はそれと距離を保ち、手習自体に道徳的意義を見いだし学問への接近を図り、理想的な人間形成を模索した。

こうした作者の一人が三近子である。初期の消息科往来物が『書札調法記』(1695)と『用文章指南大全』(1697)で、いずれも都市風俗を理想化し、繊細で情緒的な社交の世界を描く一方、為政者の世界と武士特有の心の在り方を強調した。二作とも庶民生活が求める実用性とはかけ離れていたが、漢詩の形式による雑俳集の『漢諧沓付』(1700)では都市風俗の実態をありのままに捉える。この時点で庶民の需要への積極的な対応、為政者と庶民との、双方の世界の一体化といった点では未解決だが、都市風俗を理想と現実の両面から捉える視点は具えていた。

著作の再開は『切磋藁』(1722)からで、同書では「明君」による「太平」の実現とその複雑さ、困難さが説かれた。版本の著作を再開する『象のみつき』(1729)では対照的に仁政と徳化を楽観的に描き、そこに参画する庶民が道徳を自覚することを求めた。同書の背景に象の渡来を扱う漢詩集、教訓書の流行がみられる。それらはいずれも武力と法度による支配を優先した幕府の意向とは別に「太平」のイメージを増幅させ、民間での教化活動を担った。三近子の教訓書への参入は仁の理想を君主の人民に対する善政により実現するという、仁政論への参入であった。

第二部では量産期(1729〜35)の作品をもとに、三近子の教育思想を考察する。

武士向けの『温知政要輔翼』(1731)では仁政論に独自の解釈を加え、仁政を継続してゆく条件として「心法」「学問」の必要を説いた。それは「天道」が正常な「気」の働きにより「仁慈」を施し続けているのに従い、人の側に生じる「気」の不正や偏りを防ぎ、社会の成員同士、協調性を乱すことの無いよう、修めるべき心の工夫であった。一方で「力量」「知」は能力の差異が著しく、個人間の対立を招くため軽視された。「心法」は庶民に適用され、教化の可能性が課題とされた。

改訂版の『温知精要輔翼』(1731)では「念慮」に詳しい。それは仁政が履行されない場合、人民の側に生じる怒りの心であり、そうした心が多数集まり、大きな力を発揮することが君主にとっての脅威と捉えられた。

教訓的な読本の『児戯笑談』(1749)で「念慮」は「善念」に置き換えられる。それは万人が自己の根底に有し、互いに善事・善行に共感しあう心であった。同書は庶民生活に即した「学問」を詳説する。その役割は、反省の必要に迫られ、また窮地に陥るなど、生活上の要点ごとに「善念」の所在を確認し、さらには道徳的な実践の質を高め、庶民の側から「仁」の実現に参画してゆくところに見いだされた。「学問」も都市風俗の現状との対峙を課題とした。

教訓科往来物の『六諭衍義小意』(1731)では、そうした「学問」の内容を平易・簡潔に教材化する。同書の「善念」は各人の真情を意味し、それを自家、奉公先、同族、地域社会での人間関係に適用してゆくことが、庶民による「仁」実現の過程とされた。そのさい知識と財産は共有物で、人は本質的に平等で、相互依存による対人関係が尊重された。

消息科往来物の『四民往来』(1729)では手習を「学問」の基礎に置く。本書が掲げた目標は、士農工商の各々が、手習により「職分」の遂行に適した質実な心を育み、使用する語彙と文章を互いに学び合い、「四民」全体の意思疎通と相互理解に向かうことであった。実際に収められた文例は、為政者を主体とする仁政と徳化を説く傾向にあった。

同じく消息科往来物の『一代書用筆林宝鑑』(1730)では手習と文章の作成を「学文」と相対する「諸芸」に属させる。「諸芸」は自身の外側に付け加えてゆく装飾(「一身之餝」)に例えられ、日常生活に役立ち、道徳性、礼法を有した。都市風俗もそうした「諸芸」と共通する性格を帯び、

その内部に「学文」「諸芸」をあまねく配置することで、自力による維持を可能とした。「諸芸」と都市風俗も「仁」の実現に類する理想の社会を目指した。

三近子の仁政論は社会の持続と成員全体の参画を重視した上で、為政者と庶民のそれぞれが主導するものを共存させている。これら二つの仁政理解は儒教的な学問を交え、往来物と教訓書に適用された。それとは別に手習と文章の作成を「諸芸」の側に置き、都市風俗の機能を高く評価する往来物も作られるが、そこに描かれる人間関係と社会参画は庶民が主導する「仁」の実現と相通じた。

付録では三近子の合作書、関連書の内容を紹介する。筆写を担当した『女中庸瑪瑙箱』(1730)と詞書を担当した『謡曲画誌』(1732)では、都市風俗の中に生きる人々が主体的に人間関係を構築する過程を示す。序文を提供した『絵本清水の池』(1734)と次男蝙蝠翁の『家訓心得草』(1778)では保身のための処世術を説き、儒教的な学問、手習と文章の作成、都市風俗に根差した諸芸をいずれも軽視するなど、教訓が矮小化している。

三近子は庶民生活の実用に即した道徳的な教訓、手習、文章の作成を重視する。そこから儒教的な学問と様々な芸道・遊芸に広げ、学ぶべき事柄の全てをそうした実用性との繋がりで捉えた。その上で教育内容の全般を、人間関係と社会参画の理想を説く二つの枠組の中に収めた。それら二つとは通俗化した儒教思想における仁政理解と、町人の生活文化における都市風俗理解に拠るもので、両者は対等に庶民教育の内容を規定し、それを両者に相通じる理想へと向かわせた。

三近子の庶民教育思想は、家の維持と町・村の自治との両立という、当時の社会が抱えた課題を取り込んだ。基礎か応用かを問わず、教育のあらゆる内容を生活に根づかせ、教育の内容を人々が協調しあう人間関係と社会参画へと方向づけた。そうした点で近世中期の一典型であった。